

白河楽翁と菅茶山

～手折の梅一枝に感涙と報恩の誓い～

作者 上 泰二

一、国宰相楽翁と福山藩儒茶山

「茶山先生行状」頼山陽撰より

「楽翁老侯 眷遇尤も隆し。嘗て梅花一枝を折りて副ふるに國詩を以て賜ふ。歸りて備後にあり 亦 數ば寄賜あり。病むに及びて遙かに藥を賜ふ。」(元漢文)

(大意) 先生は備後神邊という片田舎に住んでおられるが、茶山という名は全国津々浦々に知れ渡っている。競って面謁を求める公侯士夫の中、楽翁老侯が最も目をかけておられた。嘗て、江戸下屋敷内庭園「浴恩園」で手ずから梅花一枝を手折り、和歌を添え、茶山に下賜された。その後、茶山が備後に在っても、贈り物を贈られ、病氣と聞けば、秘薬を届けられた。

さこそそのように、両雄を固く結びつけたのは、書「文武忠孝」と方円の手洗い鉢「水は方円の器に随う」の信条か。

二、侍浴恩園宴

文化十二年(一八一五)二月五日、茶山六十八歳は楽翁侯に招かれ、白河藩下屋敷の庭園浴恩園へ赴いた。楽翁侯は、常々、文科相林大学頭述斎が「詩は茶山」と絶賛する大詩人をこの亭舎に招聘、漢詩を詠んでももらいたいとの思いがあった。

田内主税ら諸臣にその庭園内の諸勝に案内され、春風館での宴に臨んだ。老侯がお出ましになった。茶山は杯を賜り、又、梅枝に副え和歌を賜った。

この梅は光栄にも賢侯手ずからの賜物、捧持して宿舎に持ち帰り、接換して、故園に移し栽すべし。徒に萎れるままにしてはならない。

茶山は、石田惣助(梧堂 秋田藩儒)に後事を託し江戸を後にした。

楽翁和歌二首&茶山詩二首

①陪侍浴恩園(一) 菅 茶山

郡卉分區梅作林 郡卉(ぐんき) 区を分ち 梅林を作(な)す

先知佳景四時深 先ずは知る 佳景四時に深きを

徒思每宴陪文酒 徒(いたずら)らに思う每宴 文酒に陪して

春艶秋香盡詠吟 春艶 秋香 盡(ことごと)く詠吟せんと

(大意) 園内一帯は花草木が区分けして植えられ、梅林がある。四季折々に自然の美しい眺めを満喫できる。その都度、宴に招かれ、春夏秋冬、それぞれの詩を詠んでみたい気がする。

②「故郷を おもふもしばし なぐさめよ

むめの色香は よしあさくとも 楽翁

③陪侍浴恩園(二) 菅 茶山

雪後江城風剪剪 雪後の江城 風剪剪(せんせん)たり

蘆芽未茁梅猶晚 蘆芽 未だ茁(はえ)えず 梅猶晚(おそ)し

頼因侍史詠歌佳頼(さいわい)に侍史の詠歌の佳なるに因りて

早已名園春不淺 早く已に名園の春浅からず

(大意) 雪の後の江戸は風が身を切るほど冷たい。蘆も未だ芽吹いていない。梅の蕾も固い。
幸いにも、楽翁から賜った詠歌が素晴らしいので、ここ名園にはすでに春の気配が感じられる。

*この詩を悪夢の田沼父子時代から「定信の善政を期待する「政治批判詩」と見なす人もいる。

④富士黒く 夕月白き ささ浪に はるをよそなる からかぜぞふく 楽翁 於 望嶽臺

三、茶山の古稀を祝う 賀状&記念品

①文化十四年(一七一八)二月二日、茶山七十歳の誕生日。この日、村人と塾生を招き、酒宴を催す。「七十歳辰」の中で

展観壽頌堆牀上 壽頌(じゅしょう)を展観して牀上(しょうじょう)に堆し

且喜諸公未我捐 且つ喜ぶ諸公の未だ我を捐てざるを

と深奥を詠んだ。

②三月一日、茶山は福山城に召され、古稀(こき)を祝う金を下賜(かし)された。

③三月二十九日、梶原七太夫(福岡藩士)等五人が慶賀に訪問、また、江戸からの福山便で、田内主税、伊澤蘭軒、石田梧堂から賀状が届いた。

④「七十誕辰白河侯遙賜壽歌壽杯賦此奉謝」を詠む

Last, but not least, 茶山は白河楽翁(松平定信)から壽歌と壽杯を贈られたことに、最も感動、感窮まって七古(題前述④)を詠む。

憶昨嘉招踵朱門 憶う昨 喜招 朱門に踵(いた)りしを

春風満館梅満園 春風 館に満ち 梅園に満つ

尤憶手拗一枝雪 尤も憶う手づから一枝の雪を拗り併授新製歌一? 併せて授く 新製の歌一?(けつ)を当時の様子を追憶し、目頭を熱くしている。

⑤谷文晁作「??脆餌図」が届く

五月二十一日、茶山を太公望に擬えた画が届いた。この日、岡本花亭・田内主税・平田道宣・萬波醒廬・菅野岱立・頼山陽などからも古稀を祝う賀状が届いた。

四、楽翁公の梅は何処に?

①『『戊寅吉野(大和)行日記』(文政元年(一八一八)三月六日~五月二十九日)点描

『大和行日記』にその顛末が記されている。

「戊寅の春、予医をたづねて大和へ赴く。同じく芳野の花候を過ぎと三月六日いそぎて門をいづ。出づる時帰谷の墓に参る」とあり、多くの知人たちに見送られ、弟子たちと吉野へ向けて旅立つ。

②四月三日・・・昨日、くら敷の人小野小佐衛門(梅舎・倉敷庄屋)が折から茶山逗留の京都宿舎へ石田惣助からの書を副え「盆栽の鉢植え」を携え訪ねて来た。

更に、小野は両三日に国へ帰るので、梅は持ち帰り、神邊まで届けようと云ってくれたが、元々、旧知の人ではなく、京都まで約三十里＋京都以西七十里の旅程は心易からず受け取り、宿舍の庭に置く。

③四月四日 於 高倉四條下 みのや小野小佐衛門に一礼をのぶ

④楽翁から下賜された梅の顛末大団円

文政四年（一八二一）一月二日、その梅が牧唯介（大阪・茶山弟子）書「白河侯園中の梅接ぎ木二株寄せる」を添え、廉塾に届き、二日後、植栽された

五、その後の楽翁公と茶山の交流

浴恩園での招宴以後、茶山は楽翁侯に「高低を自在に変えれる書見台」や詩を送っている。楽翁侯からも磁盃を贈られるなど交流が続く。

① 文政六年（一八二三）茶山が磁盃を贈られたお礼の詩

「奉謝白川老公惠二卮」

描花貌鳥一雙卮 花を描き 鳥を貌(かたど)る一雙の卮(さかずき)

不用行吟尋酒資 用いず 行吟して酒資を尋ぬるを

卻憶曾陪公嚙日 卻(かえ)って憶う 曾て公謙(こうえん)に陪せし日

為吾手自折梅枝 吾が為に手自ら梅枝を折りしを

(大意) 花と鳥を描いた一对の杯を賜った。花を吟ずる時、これを使うのは畏れ多い。これを観ると、あの日、侯の宴に陪従したことを思い出す。畏れ多くも、私のために自ら梅一枝を手折ってくださったことを……。

② 文政七年（一八二四）四月二十三日、楽翁からの書簡（侍臣田内主税代筆か）が届く。

③書簡要旨

- ・先に茶山が贈った書見台と奉謝詩へのお礼。

- ・「奉謝白川老公惠二卮」については、「佳作玉詠」と一入感吟いたされ候」との報告。

- ・「文政六年三月、陸奥白河から伊勢桑名へ転封となった」との連絡。

- ・結び 妻宣、門田朴齋、北条お敬様あてのごあいさつで筆を擱いている。

六、「浴恩園図並詩歌巻」

この回想集には「大明梅」（星野文良画）と「浴恩園図」（董烈画）が織り込まれ、前者は田内主税がその由来を説明後、「かの手折りまいらせし梅のすがたを、ここにうつさしむ」と付け加えている。

七、巨星 相次いで逝く

漢詩人として全国に有名を轟かせた茶山も文政十年（一八二七）八月十三日に没し、川北村網付谷に葬られた。八十歳であった。

「寛政の改革」を主導した松平定信(楽翁)は茶山より二年後、文政十二年（一八二九）六月十四日歿する。享年七十二歳であった。文政六年、白河藩は桑名に転封となるが、定信はそのまま江戸に留まり東京の靈巖寺に葬られた。 終わり